

いんば沼

《第26号》



印旛村雁又の“弁天様”

*****Contents

- 印旛沼の宿命と使命……瀧 和夫
- 印旛沼周辺の植物……松平喜美代
—出会いと思い出—
- 印旛沼の水……本橋敬之助
—汚れと原因、そして私たち—

財団法人 印旛沼環境基金

<http://homepage2.nifty.com/inbanuma/>

印旛沼の 宿命と使命

瀧 和夫

(千葉工業大学 教授)

遺跡のたくさんある所は住みよい土地であると以前に聞いたことがあります。印旛沼周辺には多くの土器が出土しており、その昔は温暖な地であったことを窺わせています。千年ほど前、印旛沼、手賀沼および霞ヶ浦は一体化した大きな水域であり、平安時代には、すでに開け、かなり人が住んでいたとされています。洪水はありましたが、周辺の人々の生活は新しい水田の開発や、沼で獲れる魚介類によって豊かであったようです。

そして長い時代を経て、徳川家康が江戸に入府し、まもなく、利根川の大改修が行なわれています。これは江戸を洪水から守り、農業の安定と江戸に物資を運ぶことを目的としたもので、現在の千葉県野田市（元関宿町）の台地を切り開き、利根川と鬼怒川を結んで川の流路を銚子の方向に変更するという、いわゆる利根川東遷事業と称される工事を行いました。これによって、群馬県から流れる利根川と栃木県から流れる鬼怒川の水は、すべて銚子の方向に流れていったわけです。

利根川東遷後は、300年余りにわたって、確かに江戸の町の洪水は少なくなったものの、逆に印旛沼の周辺は、洪水との戦いに明け暮れる日々でした。この苦々しい歴史から完全に開放されたのは、印旛水門、印旛排水機場、そして大和田排水機場が次々に建設され、完成したほんの40年ほど前です。その後、印旛沼は食糧増産、経済高度成長の追い風の下での工業用水の給・送水、そして膨らむ人々への飲み水の供給などの使命を受けて活躍してきました。今や、印旛沼は、千葉県はおろか、わが国の産業発展にはなくてはならない牽引力の水瓶として重要な役割を果たしております。

一方、かつて沼周辺では、独特の文化圏を醸成してきたように思われます。印旛沼の地形が龍の姿に似ていることから、昔の人たちは、豊かな水の恵みを与えてくれる“おらが村の神様”として龍の存在を信じ、大切に祀っていました。その中から、お寺や神社を核とする豊かな文化が根付き、花を咲かせ続けているのです。祭事が生活のリズムとして執り行われ、また観る人の心を和らげ包み込む力を持っています。沼の東岸から南岸にかけては埴生神社と麻賀多神社、そして沼の北岸には宗像神社と鳥見神社がそれぞれ圏内を分かち合うように分布しております。土をつかさどる神、農耕の神、水運・治水の神、そして物部氏の祖といわれる神々をそれぞれが祭っています。この他、印旛沼周辺にはさまざまな言い伝えや、辻に残る祠や、湧き水、池などにも数多くの秘められた物語が残されています。さらには、印旛沼の水辺や湖面には自然が持つ多様性に溢れ、子供たちは水辺風景の移り変わりを描き、自然の神秘に素直に驚嘆し、幾度となく触れてみようとして手を差し出し、足を水に入れる光景は、そこ彼処にみられたものです。これが私たちの意識の底にある「印旛沼の原風景」といえるのではないのでしょうか。結局、このような奥深い文化と自然が印旛沼流域住民の心の癒しとなり、家族の憩いに繋がるものであり、忙しく立ち働く人々の心を捉えて止まないのだと思います。

しかし、近年では印旛沼周辺に人々が集まり、道路や鉄道などの便利さがごく近くにまで押し寄せるようになってきました。印旛沼が本来持っていた原風景にモダンさが加わり、稲穂越しに折り重なる瓦屋根、または斜面林を覗き込むように高層ビルが立ち並んでいます。そしてこれらの開発の代償として、印旛沼の水は緑っぽい色を呈し、湖水に触れられることなく、唯々、遠くから眺めるのみとなるばかりか、今やその存在すら十分に意識されることなく、生活排水や都市雨水などの受け皿としての沼に甘んじ「戦いの沼・心の沼」を忘れ去ってしまったかのようです。

歴史を辿ると、今から約280年前に現在の八千代市平戸の名主、染谷源右衛門が幕府からの6千両の借入金と私財、その他を合わせて30万両をもって、印旛沼の水を東京湾に導く大事業に取り掛かったのが“印旛沼の治水”のはじまりですが、資金不足のため志半ばで挫折してしまっています。その後、間をおきますが、明治に入って利根川の水が印旛沼に流れ込まない

ように印旛水門の建設事業を、本埜村の吉植庄一郎と庄亮の親子が50年の歳月を掛けて行い、大正11年にやっと完成させたのです。これによって、利根川からの溢水（外水と称されていた）による洪水を防ぐことができました。しかし、洪水との戦いは、その後も絶えることなく続きました。それは印旛沼流域の隅々から流れ込んでくる水（内水と称されていた）との戦いです。印旛沼に流入する鹿島川のかなり上流に位置するJR物井駅付近の農家では、今でも蔵の中に小さな船をしまっているそうです。このことは、この辺りまで沼の洪水の影響があったことを意味するものです。また、利根川沿いにある“桜土手”は、現在にまで続く洪水との闘いの歴史を物語るものです。印旛村と本埜村の境のあたりから安食方面に向かう水害防止のための土手として築造されたものです。大雨で堤防が決壊すると、そのすぐ脇で洪水の力によって深掘れされます。地元の人はこのようにしてできた池を押堀（おっほり）と云い、今でも洪水の爪痕としてあちらこちらにみることができます。その掘れた穴を迂回して堤防が造られたために、くねくねとした堤防となっています。これが現在の県道です。また、点々とある池は幾度となく繰り返された洪水と堤防の決壊の酷さを物語っているといえます。

話は足早と変わりますが、印旛沼の陸に目を向けると、昭和の高度成長期までは水田の干拓が沼周辺の低地で行われた程度にすぎなく、土地利用については大きな変化がみられませんでした。しかし、平成13年現在における土地の利用形態をみると、昭和40年代の初めと比較して、市街地等の面積は山林・畑地・水田の減少面積（約16,000ha）に相当して増加し、流域面積の40%近くを占めるまでになっております。これは市街地等が緑を犠牲にして拡大してきた結果といっても過言ではありません。一つの例かも知れませんが、市街地面積が流域面積の40%を超えはじめた頃から、雨水の地下浸透が乏しくなり、急激に河川の水嵩を高めるようになったことが船橋市街を流れる真間川流域で観察されています。このような事態は、流域の発展（市街地等の拡大）が今後も見込まれている印旛沼においても、決して対岸の火事として見過ごせるものではないように思われます。このことからしても、将来、湧水としての水量が減り、地表面の汚れを抱え込んだ水が川を満たすことがないように一人一人が注意をしなければなりません。清浄な安定した水質の水が川を常

に流れ続けることが印旛沼にとって重要なことなのです。

平成9年5月の河川法の一部改正によって、河川環境（水質、景観、生態系等）の整備と保全が明文化されました。いまや、「憩いや潤いの場」という新たな使命をこの印旛沼に求められているわけです。このことは、ただ単に、湖面にとどまるものではありません。そこが窪地であったから湖水が溜まったのであり、水質はそこで作られたものではありません。いろいろの過程を経て、その結果としての水質であるということをしっかり認識するべきです。湖水の環境は流域環境に大きく左右されるのです。

その一つとして、平成11年に硝酸性窒素が地下水の水質汚濁に係る環境基準項目に追加されました。水道水源を地下水に依存する割合の高い地域を対象とした全国調査（平成14年調査）によると、調査対象井戸（4,207本）の87.1%の井戸水から硝酸性窒素が検出され、そのうち、5.9%の247本が環境基準値（10mg/l）を上回っていることが明らかとなりました。この基準は硝酸性窒素の過剰な摂取が乳児におけるメトヘモグロビン血症の原因となることから決められています。硝酸性窒素による地下水汚染は畑地への施肥、生活排水、家畜排泄物など、多岐にわたっております。印旛沼周辺の台地は大消費地東京の隣接地として古くから農業が盛んで、自家製の野菜を背負籠と両手に持った“もんべ姿”のご婦人達を乗せた行商列車が京成線を行き来していたほどです。今も大農産地であることには変わりはありません。また、酪農の盛んなところでもあります。このようなことから、台地での地下水汚染はとりもおさず印旛沼周辺の谷津の湧水を経て湖水そのものを汚すことになります。適正な施肥量、生活排水の減量・下水道化、家畜排泄物の有効利用・適正処理など窒素負荷の低減が“よい環境”を生み出すためになくはならぬ重要な課題であるといえます。

人々の健康、絶えることのない安らぎを求めて、私たちはいま何をすべきか。印旛沼の姿と私たち、湖水の質と量、そこに生きる動植物、原風景などの環境の継承、環境学習や活動などにおける思いは個人でそれぞれに異なるものです。その中で、共通の認識に立った新たな使命を作り出すことが大切です。大いに考え、悩む場が必要であると思われます。今、ここで、印旛沼の地でその将来と多様な使命について語り合うことは意義深いことと思います。

印旛沼周辺の植物

— 出会いと思い出 —

松平喜美代

(野草研究家、佐倉市在住)

≫ 植物という“友”との出会い……

昔、印旛沼の見える丘で行われた子供会の「イモ掘り会」に、育成会メンバーの一人として佐倉市の千成団地から100人近い子供たちに付き添って歩いていったことがあります。途中、子供たちは「あつ あの実は何ていうの?」、「赤い鳥が食べにくるのよ!」、「じゃ、青い実は青い鳥が食べにくるの?」、そして合唱がはじまった。「赤い鳥小鳥、なぜなぜ赤い、赤い実を食べた……♪♪」

ガマズミの赤い実、ムラサキシキブの美しい紫、宝石のようなサワフタギのブルーの実、ヤマブドウのような小さな黒い実をつけたエビヅルなど、秋に彩りを添えたいろいろな植物の実を眺めながらイモ掘りに向かった。この「道草食って」植物の実の観察は、イモ掘りもさることながら、子供たちも、育成会のおばちゃんたちにも楽しいひとときでした。

しかし、実は、この時、私は東京から佐倉に移り住んできたばかりで、この“赤い実”や“青い実”は、一体、何の実なのか全然わからなかったのです。このため、子供たちの間に対し、「赤い鳥が食べたのよ!」ととぼけざるを得なかったのです。それにしても、当時の沼周辺における自然の豊かさには、正直のところ、びっくりしていました。

ここで、私事になりますが、その時にみたピンクの可愛い花に魅せられ、そしてその名前を知りたいと思ったことが、私の植物好きのきっかけになったのです。その後、公民館が行った植物観察会に参加する機会を得て、その花が「コシオガマ」であることを担当の先生から教えていただいたのです。

≫ 土浮の伝説と植物たち……

佐倉市で、印旛沼に面した土浮は土地の人が「チチキ」という、ちょっと変わった地名があります。ここ



コシオガマ

は、遠い昔、松虫姫が印旛村萩原の薬師を詣でるため、沼の岸に着いたが、強風のため、船が出られなくなり困り果てていたところ、沼底から土が浮き上がり、橋ができ、無事、それを渡って行ったという伝説に由来するところです。

古い話ですが、15、16年前、大雨が降り、勝田台にある大和田排水機場がフル稼働していると聞き、私たちは沼を見るため、印旛大橋の土手に駆け上ったことがあります。その時、目にしたのは沼の中でふわふわとたくさん浮いている大小さまざまな浮島でした。中には、ヨシやマコモが生えたままの島、背の低いイネ科か、もしくはカヤツリグサ科の植物が生えている島、また、ひときわ目立って黄色い花を咲かせたセイタカアワダチソウの大きな島もありました。そしてこのような光景を見て、私たちは、先に述べた伝説にある土浮の名の由来が納得できたことを覚えております。

また、関連して、かつて古老から聞いた話、「むかし、むかし、大雨が降り、百姓たちは田んぼが流されはしないかと心配しながら朝を迎え、大急ぎで海隣寺下の田んぼへ行ったところ、田んぼには竹が挿してあり、ぶつとい縄で海隣寺の松に結わいてあった。これは、天狗さまの仕業に違いない」、という件（くだり）の昔話を思い出します。恐らく、この話も、土浮伝説に関連するのではなかろうか、と思います。

≫ 堤防の植物たち……

印旛沼を囲む堤防に生活する植物は、実に多種多様で、面白く、これに堤防の工事が加わると帰化植物の宝庫になります。

私が堤防の植物に興味を覚えたのは、20数年前、友達にクスダマツメクサが佐倉で稀にみられ、しかもそれは印旛沼の堤防にあると聞き、さっそく土浮干拓の土手に行き印旛大橋側で2～3株確認してからです。この種はシロツメクサより小さい黄色のマメ科の可愛い花です。これは、昭和63年頃より急速に増えだし、ミヤコグサやコメツブツメクサよりも多く見られるよ

うになってきた種です。また、平成12年頃には印旛大橋脇の堤防から双子公園にかけて、足の踏み場もないくらい増えていました。また、このように、急速に増えていく帰化植物には、アカバナ科の黄色のヒレタゴボウがあります。これは畦や水田に育ちますが、20数年前からは印旛沼の周辺、さらには印旛村の田まで広がり始め、佐倉市の大佐倉、そして今では、井野地区や和田地区あたりの田にも見られるようになりました。

また堤防には、この他にもブタクサ、ツボミオオバコ、ナギナタガヤ、ヤセウツボ、ミチタネツケバナなどの帰化植物も見られます。しかし、堤防の沼側の法面（のりめん）には、昔ながらのイヌドクサ、イヌスギナはもちろん、オギ、ヨシ、マコモ、そして水面にはヒメガマもみられます。一方、堤防の上にはカゼクサ、オニウシノケグサ、チガヤが多いが、印旛沼浄水場の浜田橋付近にはアレチウリがはびこっていました。そしてここを過ぎて舟戸大橋までの堤防にはイタドリ（5月頃食すると美味）が多くみられます。

なお、サイクリングロードが完成し、アジサイが植栽されましたが、その後、誰が持ち込んだか知りませんが、フランスギクが増え始めています。これは、きれいな花ですが、沼には似合わないように思えます。



クスタマツメクサ

≫ 鹿島川沿いの植物たち……………

鹿島川は高崎川、南部川など支流を集めて、沼に注ぐ水量の豊富な川です。最近、鹿島川本流の源はどこにあるのか？ そんな興味を持って河口から上流に向かって歩いてみたところ、実に、いろいろな植物をみることができました。

まず、沼から竜神橋に向かった川岸にはナガエツルノゲイトウが所々に半島のように広がっていました。しかし、高崎川の合流点から上流には見当たらなかった。この周辺は護岸がコンクリートでないので、ヒメガマやマコモが多くみられます。寺崎周辺の堤防は歩くことが出来ないほどイタドリが繁茂しています。馬

渡地区および大篠塚地区あたりからは水の流れる音が聞こえ、川岸にはオギやアズマネザサが多くみられるようになりました。千葉市に入ると、谷当地区および大井戸町の川岸はセイバンモロコシ、セイタカアワダチソウに変わり、川の透明度も良くなり、沈水植物もみえ、釣り糸を垂らしている人も見かけました。若葉区に入ると、至る所に湧水があり、地名も大井戸町、下泉町、上泉町、古泉町、和泉町などと湧きでる泉に関係した地名が多くあります。実際、大井戸町には「子和清水」といわれる湧水が、今でもこんこんと湧き出ています。さらに、川べりを登ると、道幅が狭くなり、山のきわを歩くことになりますが、そこではガマズミ、マユミ、ビナンカズラ、ムラサキシキブ、メギ、ツヅラフジ、コマユミ、スズメウリ、カラスウリなどをみるができます。そして若葉区中野あたりに来ると、川は三面コンクリート張りとなり、ここから土気までは植物の記録などができない状況になり、川は土気調整池で終わっていました。しかし、古地図を頼りに、さらに突き進んでたどり着いたところは、「昭和の森」の太陽の広場で、そこに鹿島川の源泉らしい跡形がわずかに残っていました。

≫ おわりに……………

ともあれ、鹿島川は台地から沼へ注ぎ込むいろいろな水筋の一つにすぎませんが、どの水筋にも多くの植物が生活し、水の調整役割を果たしているのです。涵養樹林のスギ、極相林のスダジイやシラカシ、里山にはイヌシデ、コナラ、クヌギ、谷津の流れ沿いにはコウホネ、ミズニラ、ミズワラビ、ミクリ、ハンゲショウ、サクラタデ、そして谷津の斜面にはカザグルマ、カタクリ、キツネノカミソリなどが自然の温もりの中で人々と共存し、生き長らえてきたのです。私たちは、この自然の命が消えることのないように、できる限りのことをしていかなければならないと思うのです。



サクラタデ

印 旛 沼

—汚れの源と、私たち—

本橋 敬之助

(財団法人 印旛沼環境基金)

1 沼の水質と利用の状況

千葉県北西部に位置する印旛沼は、隣接の手賀沼とともに、昭和27年に「印旛手賀自然公園」として千葉県立公園に指定された風光明媚な湖沼である。しかし、清冽な水を満々と湛えていた沼は、昭和38年から5カ年の歳月を掛けて行われた「印旛沼開発事業」の干拓によって、水面の半分近くを失うと同時に、沼の水質は、この干拓を境に悪化を辿り、昭和51年度には、不名誉にも環境省が発表した全国公共用水域水質測定結果の中でCOD（化学的酸素消費量）を指標とした湖沼水質ワースト5にランクされた。

そしてこの後は、昭和52年度～53年度の2カ年と、昭和63年度～平成5年度の6カ年を除き、平成15年度現在までワースト5内のランクから脱出できない状況にあるが、最近5カ年の水質（COD濃度）の推移をみると、沼の環境基準（3mg/ℓ以下）を達成するまでには至らないが、平成11年度に12mg/ℓ（全国湖沼ワースト2）であった濃度が、平成15年度には8.4mg/ℓ（ワースト5）と、確実に減少傾向を示している。しかし、水道水源として利用されている湖沼の中にあっては、依然として“全国一”に汚れた湖沼である。

にもかかわらず、印旛沼の水は千葉県総人口の約4分の1に相当する150万人の県民（市川市および浦安市の全区域と、千葉市、船橋市、習志野市および市原市の一部区域を中心として、この他に印旛沼流域内の佐倉市、八街市等を加え計11市町）に飲料水として直接・間接的に供されているとともに、農業用水（用水受益灌漑面積は流域総面積の約13%に相当する63.0km²）や工業用水、特に、工業用水としては、沼の

全利用水量（年間2.68億トン）の約60%に相当する1.58億トンが日本経済の一端を担っている千葉県臨海部の工業地帯に給水されている。

このような利水状況をみると、印旛沼は千葉県民の“命”は疎か、日本経済の“命”を守る大切な水がめなのである。

本報では、このかけがえのない“命の水がめ”を“命取りの水がめ”に変えつつある沼の汚れの背景と要因についてかいま見ることに、今、私たちができることを探ってみることにする。

2 沼流域における土地利用形態の変移

清冽な水をいかに多量に湛えた湖沼、また滔々と流れる大河といえども、いずれは歴史的な過程の中で流域から流れ出てくる自然由来の物質の堆積等によって汚濁していくのが常であるが、その速度は自然の中ではすこぶ遅く、地質年代的である。これに対し、印旛沼はもとより、ここ数十年の間に急速に生じた津々浦々の水質汚濁は、流域での人為的な活動によって排出されたいろいろな物質が起因となっているが、その程度や速さは、基本的には流域での土地利用形態の変化が大きく関与しているといえる。

実際、このことに関連して、平成15年度現在における印旛沼流域の土地利用の形態別増減を流域総面積に対する割合でみると、昭和60年度に比べ山林は4.4%（21.6km²）、水田2.1%（9.9km²）および畑は3.6%（17.6km²）といずれも減少を示しているのに対し、市街地等は、それらの減少分に相当する10%（49.1km²）の増加を示し、平成15年度現在ではその流域総面積に占める割合が42.2%となっている。そして流域人口は、この市街地等の面積拡大と相まって、平成15年度現在で昭和60年度に比べ20.4万人増の73.3万人となっている。

3 水の汚れの源と負荷量

一般的に、水の汚れをもたらす汚濁発生源としては、大きく下水処理浄化施設・一般家庭等の生活系、工場・事業場・畜産等の産業系、そして山林・水田・畑・市街地等の自然系の3つに系別されるが、ここで、印旛沼流域におけるこれら系別からの1日当たりの汚濁発生負荷量をCODでみると、平成15年度現在では生活系が2,831kg、産業系466kg、そして自然系は4,188kgと、生活系と自然系で流域全体の総発生負荷量（7,485kg）のほとんどを占めている。

このことから、さらにこれら2つの系における発生負荷量、すなわち生活系については処理浄化形態、そして自然系は土地利用形態のそれぞれから眺めてみる。

まず、生活系の負荷は流域下水道、公共下水道、農業集落排水処理施設、合併処理浄化槽、単独処理浄化槽、し尿処理場および自家処理（たとえば農地還元）のそれぞれからの発生が考えられるが、このうち、流域下水道と公共下水道からの負荷は流域外の水域（前者は東京湾、後者は利根川）に排出されるので、結局は、残りの5つの処理浄化形態からの負荷が沼の水質に関与することになる。中でも、単独処理浄化槽（1,546kg）からの負荷は流域総発生負荷量の約21%と最も大きな割合を占め、次いでし尿処理場（1,003kg）約14%、合併処理浄化槽（265kg）が約4%と続いている。

確か、単独処理浄化槽は、平成12年6月2日に一部改正された浄化槽法によって浄化槽の定義から削除され、その設置は平成13年4月1日をもって廃止されたが、法改正以前に設置された単独処理浄化槽は、依然として使用され、平成15年度現在では流域人口の9%に相当する69,307人が利用し続けている。一方、同時にこれらの人数は、生活雑排水の未処理人口でもあることから、下水道の未計画区域では一日でも早く発生負荷の比較的小さい合併処理浄化槽への転換が望まれるところである。

つぎに、自然系の負荷については山林、水田、畑、市街地等からの発生があるが、印旛沼流域では市街地等（2,379kg）からの負荷が流域総発生負荷量の約32%を占め最も多く、続いて水田（847kg）約11%、畑（473kg）約6%となっている。特に、ここで、市街地等からの発生負荷は、驚くことに、上述した生活系の単独処理浄化槽とし尿処理場を合わせた負荷量（2,549kg）に匹敵する量でもある。これは、土地の市街地化への改変が生活系とともに、いかに大きな汚濁負荷の発生源になり得るかを物語るものである。そして、このことは、ただ単にCODの発生負荷について限った話ではないところに、より深刻な問題がある。

要するに、市街地等への土地利用の改変は、印旛沼の水質悪化に大きく影響するアオコ（沼のCOD値の約50%を占める）の大量発生を招く窒素およびリンの大きな負荷発生源になっているのである。現に、平成15年度のそれら栄養塩類物質の発生源別負荷量をみると、全窒素は畑（994kg）が最も多く、流域総発生負荷量（3,643kg）の約27%を占めるが、市街地等（693kg）はそれに次いで19%を占め、そして合併処理浄化槽（521kg）、単独処理浄化槽（520kg）が続いている。一方、全リンは単独処理浄化槽（55.4kg）が流域総発生負荷量（282kg）の19%を占め最も多く、次いで合併処理浄化槽（54kg）、特定事業場（44kg）、そして市街地等（35kg）と続き、市街地等は窒素およびリンの発生源として無視できないのである。

4 沼の浄化に私たちができること……

いずれにしても、以上の結果をみる限り、印旛沼の水質悪化に大きく関与しているのは、私たちの快適な日常生活を影で支えている生活排水の各種処理浄化施設であり、また私たちの生活基盤となっている“市街地等”である。このことは、私たちが印旛沼の水質浄化について考える時、何も気負うことなく、家庭の中で一人一人が少しの気配りをするることによって容易に成し遂げられることを示唆している。たとえば、水質悪化の原因となる“物”を各家庭から出さないことは勿論、この他に下水道計画が策定されていない区域での単独処理浄化槽の合併処理浄化槽への転換、専門業者による各種処理浄化槽の適切な維持管理、雨水とともに敷地等から生じるいろいろな汚濁物質が沼に流達しにくくなるような工夫（たとえば、雨水ますの設置や周辺街路の清掃など）、また減肥・有機農産物志向（農耕地での施肥量軽減につながる）の食生活に変えるなど、今日から個々人の思いひとつで実行に移すことができる。とにかく、印旛沼の浄化には、まずは“流域に住む住民一人一人の足元から”と言い切れるのではないだろうか。

資料出典：千葉県環境生活部水質保全課

■■■表紙の写真■■■

印旛村雁又地区にある“弁天様”です。かつてこの周辺は木々が鬱そうと茂り、冬にもなると弁天様を取り囲むお堀の水面が厚い氷で被われ、地区の子供達にとって、そこは下駄スケートの格好のリンクになったという。今は、明るく、きれいに整備され、昔の面影はない。

川島俊彦写真集

【印旛沼 シリーズ】

— つり —



昭和30年頃に撮られた写真ですが、これら2枚の写真に添えた川島氏の説明文によると、上段は、「木造橋の杭の下などにはモクゾウガニやウナギが隠れている」、また後段は、「ヨシの緑が濃くなり始める頃、ヨシキリのギョギョン、ギョギョンという鳴き声を聞きながら、ウキを見つめる鮒釣りは格別で醍醐味のひとつであろう。空腹になれば腰の風呂敷包からシソの葉を巻いた“むすび”を取り出し、頬張るのが、また一つの楽しみである」と記してある。

【川島俊彦さんのプロフィール】

略歴：

- ・ 1934年 酒々井町に生まれる
- ・ 1947年 独学にて写真を学ぶ
- ・ 現在 全日本写真連盟会員・NPO法人国際美術協会会員等

主な作品：

- ・ 1980年 毎日グラフ「フォトユーモア」掲載
- ・ 1991年 全日本写真連盟千葉県本部入選
- ・ 1991年 酒々井町制施行100周年コンテスト（最優秀賞）
- ・ 1996年 印旛町教育委員長賞（優良賞）
- ・ 2003年 千葉県社会保健協会（特選）
- その他、入賞、入選多数

編集後記

川島氏の写真をみて、またそれに添えた説明文を読むと、子供の頃を思い出す。一人で魚釣りをする時には、魚が何処のどの辺にいるのか、仲間には、決して教えることはなかった。しかし、仲間と行う“かぼし”になると、そうはいかない。とにかく、いろいろな情報を出し合い、皆で場所を決定した。“かぼし”とは、方言であるが、農水路や小川などをせき止め、水をかい出し、そして魚を手づかみで拾い上げるという、いわば原始的な漁法のひとつである。そして捕らえた魚はなくなるまで、じゃんけんを繰り返し、勝った者の順から好きな魚を選び、分け合った。当然、そこには恨みも、喧嘩もなく、まさに平等そのものであった。当時、子供たちは“平等”の意味について学校でも、家でも教わることはなかったが、このような遊びを通して、平等には個々人に能力差もあり、順番があり、我慢が必要などのルールを知った。これに対し、現在に生きる子供たちは、学習塾だ、テレビゲームだ、パソコンだ、携帯電話だと、とにかく忙しく、仲間と遊ぶことが少なくなっている。その結果、何事かが起こると、“切れたの、切れないの……。これでは、世界の人々が求めている“平和で平等な社会”にどうやって参画していくのか、心配である。どうだろうか、世の大人たちよ、もう少し、子供たちを仲間と遊ばしてみたら……。と思う。

(K.M 記)

編集・発行：財団法人 印旛沼環境基金

平成17年 5月31日発行

〒285-8533 千葉県佐倉市宮小路町12番地

Tel：043-485-0397 Fax：043-486-5116

ホームページアドレス <http://homepage2.nifty.com/inbanuma/>

「いんば沼・第26号」